

公文式本市場教室 火・木 3~7時 TEL 61-4936(上平方)

横割教室 月・水 3~7時 TEL 61-8891(福島方)

指導者：新妻ゆき子 携帯090-2260-0671

Eメール:yvonne-yukiko@mbi.nifty.com

携帯アドレス:yvonne-1682-yukiko@docomo.ne.jp

ゆきこくもん

検索

ホームページ <http://www.yukiko-kumon.com>

2019年

ホームページへGo!→
スマホで教室だよりが見られます



教室だより 1月号

年賀状

年賀状の原型は平安時代または奈良時代に、宮中で貴族が新年の挨拶を文にして交換したのが始まりといわれています。昔から、新年は新鮮な気分となる特別な日であったようです。もちろん当時は交通機関のみならず通信網も整備されていないため、遠方の人に手紙を出すことは難しい時代だったでしょう。そんな時代だからこそ、年始に手紙を交換する習慣が特別な行為とされていたのだらうと思います。

その後も戦国時代は飛脚の活躍により通信網が発達し、明治4年には郵便事業が開始され、明治6年にはハガキが誕生します。明治10年にはすでに現在の年賀状に近い、年始郵便と呼ばれる広告付きのハガキが発売されました。その後も年賀状は100年以上の歴史を歩み続け、近くのポストに投函するだけで遠方にも郵便物が届く日本の郵便システムの利便性もあいまって、現在も習慣として存在しています。

しかしながら現在では、電子メールやSNSの普及にともない、元日の年賀状配達枚数はピークの1993年から4割以上減少しているそうです。また最近、「これを最後に、年賀状を出すのをやめさせていただきます」という年賀状を目にするようになりました。

師走の忙しい中、年賀状を書くのはたいへんですが、なくなってしまうのは、やはり淋しい気がしますね。

公文式の創始者・公文 公（くもん とおる）先生の言葉より

“学年より先に進むことで、充実した学校生活が過ごせる”

自分が小学生、中学生だった頃に、ある教科にとっても興味をもち、もっと先のことまで教えてもらっていたら、その教科がもっと好きになっていたかもしれないと思うことはありませんか。能力はあるのに、それを伸ばす方法を示されなかったために宝の持ちぐされに終わるとしたら、これほどもったいないことはありません。意欲に燃えて伸びようとしている時期に、年齢にこだわってせつかくのやる気に水をさすようなことがあってはなりません。

公文式では、小学生のうちから無理なく中学課程、高校課程に進ませて、自信と余裕をもって学校生活を送ってほしいと願っています。先の内容を公文式で予習していることで学校の授業はよく理解できますし、家庭でも勉強に費やす時間は少なくすむでしょう。

そうして得られた時間で、他の教科の勉強や、クラブ活動なり読書なりに思い切り打ちこんでほしいのです。

2019年 1月の学習日

日	月	火	水	木	金	土
		1 元日	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14 成人の日	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

本市場教室日□

横割教室日△

保護者様へお願い。

お休みのときは電話でもメールでも結構ですので連絡をお願いします。

1月分の会費引き落としは12月28日(金)です。よろしくお願いたします。

(注)休会・退会の場合は、引き落としの関係から15日までにお申し出下さい。

教室からご家庭に連絡される生徒さんの場合は固定電話・指導者携帯電話・メール等はいずれも10円納入願いたします。

*学習終了後、学校の宿題をやってもかまいませんが、おしゃべりしたり、だらだらやる子は、即退出してもらいます。ご了承ください。

様

*ゆき子の一言コラム

明けましておめでとうございます。いつも本市場・横割公文式教室にご理解いただきありがとうございます。今年にはさらにレベルアップ、もっとできる！を目指していこうと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

～直しが多かったときに、その辛さをわかってあげるからこそ、いちばんの応援～

公文式の学習は、その子その子の「ちょうど」にあわせて教材が用意されますから、いきなり難しくなることはありません。とはいえ、単元の最後のほうでは、いろんなパターンの問題がミックスして出てきたり、少し意地悪な問題や、根気を要する問題が出てきます。

公文式は、その日の教材を全部100点に仕上げないと教室から帰れませんので、時には直しが多くて、なかなか終わらない日もあるでしょう。送り迎えで、教室の外で待っていて、なかなかお子さまが出てこない、イライラされることがあるかもしれません。やっと教室から出てきて、車のドアを開けた瞬間、「こんなに遅くまで、何やってたの?」と、思わず叱り口調でお子さまに声をかけていることがないでしょうか。

学習はすらすらできるときばかりではなく、間違いながら、それを直すことによって力をつけていく段階があります。どこが間違っていたのか、自分で見つけて自分で直すことで、注意力と粘り強さを身につけていくのです。間違いから学ぶことは、進歩・向上の鍵であり、最後までやりとげる姿勢は、その後の学業生活、社会生活にも大きく役立ちます。お子さまがなかなか出てこない日は、まず「どうだった?」と聞いてあげましょう。

聞いてもらえば、子どもはその日の学習の大変さを説明できます。

何度も消してやり直した、少ししわくちゃになったプリントは、がんばったお子さまの証しなのです。

直しが多かったときに、その辛さをわかってあげるからこそ、「がんばる力」を強くしていくための、いちばんの応援になると思います。

子どもが家庭で本と接する機会がありますか

子どもが読書をすることは、子どもの学力をつけさせ、成績を伸ばすための王道です。ですから、できるだけ小さい頃から本を読む（読み聞かせる）ことが大切です。

読書の楽しみ、喜びを感じて、成長してきた子どもは、その後も、自然に本に手が伸び、さまざまな分野の本を読もうとします。子どもは、本を読むことで、文章を知り、リズムを知り、漢字を知り、知識を得、疑似体験をします。このことは、自然に学び、学力を身につけていることになるのです。

子どもに、「本を読みなさい」と言うことは、決して難しいことではありませんが、そこに説得力がなければなりません。「だって、本なんて面白くないもん」

そう返ってきたとしても、今からでも遅くはありません。本を読むことの大切さ、楽しさを教えていきましょう。

一般に、家に本が溢れている家庭で育った子どもは、本嫌い、読書嫌い、は少ないものです。

幼いときから、自然に本に接していて、それが当たり前になっているからです。

皆さん方のご家庭には、どれだけ本がありますか。どれだけ子どもが本と接する機会がありますか。

もちろん、家にさほど本がなくても問題はありません。子どもと一緒に町の図書館に出掛けることで、かなりの部分が解決します。そこでいろいろな本を見せる。一緒に開いてみる。面白そうな本を探させる。親が面白い本を見つける。借りてきて、一緒に読んでみる…。いくらでも可能性はあります。

もう一点、親が本好きであって欲しいと言うことです。子どもは親や大人の姿を見て育ちます。本を読むことの大切さ、喜びを知っている大人が身近にいるかいないかで、子どもが受ける影響は違ってくるはずですよ。

家にあるのが、なにやらセンセーショナルは見出しで埋め尽くされた雑誌だけでは、説得力はありません。

最近夫婦共働きで、あまりないかも知れませんが、“子どもが学校から帰宅したら、お母さんが本を読んでいた”という姿は素晴らしいことだと思います。また、“お父さんは夕食後必ず一定時間本を読んでいる”、“山積みされているこの難しいような本は、お父さんが通勤しながら読んでいるらしい”などという姿は、必ずや子どもに影響を与えます。

いつもテレビがついていて、大きな音が子どもの部屋にまで聞こえる中で、「本を読みなさい。勉強しなさい。集中しなさい」などと言っても、それは無理…というものです。

『子どもに読書する大切さを伝え、喜びを教え、習慣化させること』

少し努力して、家庭で環境を整えてみませんか。

*教室での決まりごと。

①はきものはきちんとそろえよう！ ②あいさつは おおきなこえで はっきりしよう！ ③もちものには なまえをかきましよう！④でんわをかりたら かならず でんわ代10えん いれてください！